
闇の中

時流 幌

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の中

【Nコード】

N3823S

【作者名】

時流 幌

【あらすじ】

注：この作品は、「オンラインゲームサイト”ハンゲーム”内の小説投稿を目的としたサークルで、投稿されたものを一部書き直したものです。そして、私はそのサークル内の投稿者と同じ人物です。盗作には当たりません。

以下あらすじ

暗闇の中の劇場で、一件の殺人事件が起きた。
容疑者は3人

果たして本当の殺人者は誰なのか。

（前書き）

注：この作品は、とても読みにくいかもしれません。

小さな劇場で一件の殺人事件が起こった。
すぐに警察へ通報され、捜査が始まった。

「被疑者はこの3人か」

「はい。間違いありません。現場の状況から考えて、絶対にこの3人の中にしか犯人はいません。」

なんて言っても劇場にはその3人しかいなかったのですから」

「それは少ないな」

「ええ、今では珍しい小規模劇場ですよ。しかも、映画もメジャーなものではないものでしたから」

「そうか」

警察署の一室で、初老の刑事とその部下らしき若い刑事が話をしている。

彼らのいる警察署には、別々の部屋にその事件の3人の容疑者が留置されていた。

「まずは……赤い服の方を連れてきて」

初老の刑事はそう言った。

すると、一人の警官がそれを聞いてうなずいてから、席を立ち赤い服を着た男を連れてきた。

初老の刑事は、赤い服の男に、

「では、あなたは犯行の起こったとき、何をしていましたか？」
と尋ねた。赤い服の男は、

「ああ、あの時？俺は、ただ単に座って映画を見ていただけだよ。
たく、映画が終わって帰ろうとしているときにすぐ後ろで急に悲

鳴が上がったから

後ろを振り向いてみたら人が死んでるんだから驚いたよ」
と証言した。

すると、若い刑事が、初老の刑事に耳打ちをする。

「口ではどうとも言えます。劇場は暗かったから、席を立ったのが誰かなんて分かりません」

初老の刑事は、黙ってうなずいた。

「他にはおかしなところはありましたか？」

「いやあ、途中で席を立って何処かに行った奴がいたが……それくらいだな」

「分かりましたありがとうございます」

赤い服の男は部下の警官に連れられて部屋に戻っていった

「次は、青い服の方を連れてきて」
と言った。

次に連れてこられた青い服の女に初老の刑事は、

「では、あなたは事件の起こった時、何をしていましたか？」

と尋ねると、青い服の女は

「私は、急に電話が鳴ったんで劇場の外に出て、廊下で話をしてから」

戻ってきたらこの騒ぎよ。本当に参っちゃうわ」
と証言した。

「他に何かありましたか？」

「席を立ったつてどこかに行った人がいたけど、ほかには特に何も
ないわ」

「分かりました。ところで貴女は、マナーモードにしてなかったんですね？」

「それくらいあるでしょう？ 問題ある？」

「いや特に問題はないですけどね。これからは気を付けてください」

「わかったわ」

青の服の女も部屋に戻っていった。

「次は、緑の服の方」

次に連れてこられた緑の服の若者に、初老の刑事は

「あなたは、事件の起こった時に何をしていましたか？」

と尋ねた。緑の服の男は、

「はい。僕は、ロビーへポップコーンを買に行きました」と証言した。

「映画の途中に？ふつうは映画の前に買うでしょう？」

「良いでしょう。急に買いたくなっただんですよ」

「なるほど……他には何か」

「途中で、誰かが席を立ててどこかに行った人がいましたがそれぐらいですね」

「そうですか……ありがとうございます」

緑の服の若者も部屋に戻っていった。

こうして、3人の被疑者から話を聞き終わった後、

初老の刑事と若い刑事は、休憩室でベンチに座りながら話し合いをしていた。

「……といっても現在の分かっている情報だけでは、推測の多い簡単なものしかできなかったが。」

「被疑者たちはどうなった？」

「はい、証拠隠滅の恐れがないということで一端、全員家に帰されて

後日又、出頭することです」

「そうか……他に何か分かったことは？」

「調べてみると、被害者には多数に恨みを買ったようなことも無かったとか。」

共犯の線は無しですかね」

「そうなるな」

「緑の若者はどうでしょう?」

「確かに、証言はどこか変なところがあった気がするが……」

「こうしてみると全員怪しく見えますね」

「うーむどこか引つかかるところがあるようなんだが……」

初老の刑事は、小首を傾げながら疲れたようにそう言った。

「疲れてるんですよ。家で休まれてはどうですか? 良い考えが出るかもしれませんよ」

「そうだな。そうしよう」

「朝川さん、そういえばあの青服の女のときの証言中!

何故マナーモードについて聞いたんですか?」

「ああマナーは大事なことからな。最近のマナーは墮落しているというし」

「まあ、確かに大切ですが。でも殺人事件の捜査中にそんなこと聞くなんて……」

「まあ良いじゃないか」

そう答えてから、一回伸びをしてから初老の刑事はゆっくり立ち上がった。

「全く、そういうの正義感っていうんですかね? とにかく、ゆっくり休んでくださいな」

「ああ、じゃあな」

初老の刑事は、苦笑しながらそう言って休憩室から出ていった。

〱翌日の新聞紙面の一部〱

昨日午後7時頃東京都〇〇区の路上で、付近の警察署の刑事、朝川博史警部補が

何者かによって刺殺されていたのが見つかった。

警察の発表によると、朝川警部補は鋭利な刃物で一突きされ、ほぼ即死。

指紋などの証拠も残っておらず、捜査は難航している。
人体構造の専門家である榎本・武蔵野医科大学教授は――

こうして、劇場での殺人事件の真相は闇の中へと消えた。

（後書き）

いかがでしょうか。

犯人の推理はできたでしょうか？

読みにくい文章をここまで読んでいただいております。
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3823s/>

闇の中

2011年4月10日18時40分発行